

シンポジウムの概要

今和泉 大

一 企画にあたって

名古屋城は近世城郭の中でも江戸時代以来の史資料の環境に比較的恵まれ、戦前より諸分野で研究が蓄積されてきた城郭と言える。とりわけ、昭和二十年（一九四五）の戦災焼失まで天守・本丸御殿をはじめとする諸建築が残り、また「大工頭中井家文書」という一級の史料が伝わっていることもあり、城郭建築の対象として、建築史の主導により名古屋城の研究は進められてきた観がある。^{①②}これら戦前・戦後の研究が名古屋城の通史の礎となっており、木村慎平氏が指摘するように、とりわけ『名古屋城史』^③や『日本名城集成 名古屋城』^④などは、精緻な分析を基に名古屋城の通史を叙述した基本文献として今日でも重要な位置を占めている。^⑤

ただし、これらの書籍・論考で叙述されてきた定説に課題がないわけではない。というのも、これらの諸研究で叙述されていることの根拠をたどっていくと、疑義が生じる場面が少なくない。たとえば、築城期の史料に関しては、書状の年代比定に誤りがあったり、^⑥そもそも他城郭に関する書状が名古屋城に関連する史料として取り上げられていたりする^⑦など、様々な問題点があることに気づく。木村氏は、名古屋城普請について、一つ一つの事実を史料に基づいて明らかにするという基礎的な作業が十分行われてきたとは言い難いと述べるが、^⑧厳密な史資料解釈も含めた基礎的な作業の不足は、普請期に限らず比較的早い時期、すなわち

江戸時代前期の名古屋城に関する事柄全般に言えることであろう。

とはいえ、これらの問題点は、今日ほど史資料を身近に参照できる環境・機会が整っていなかったりするなど、各時期の研究環境に起因するものであると思われる、故に各時期の研究の限界を示すとも捉えられる。また同時に、史資料の捉え直し、ひいては名古屋城に関する戦前・戦後の研究の再検証が長い間等閑に付されてきたという事実も私たちに突きつける。

かかる状況を踏まえ、現存する史資料が少なく、またその解釈に誤りや曖昧さが少なくない築城以来の一世紀、すなわち十七世紀の名古屋城史に特に課題が多いと判断し、当該期の基礎的事実を整理し更新していくことが求められていると考え、「十七世紀」を本シンポジウムのテーマの一つとして据えた。幸いにも、近年徳川林政史研究所によって『源敬様御代御記録』^⑨や『瑞龍公実録』^⑩など、この時期に関する史料の刊行化が進み、史料環境が一層整ってきた。こうした状況も如上の課題への取り組みを後押しする。

また別の課題として、従来の名古屋城の通史に、当該城郭を居所としてきた者たちの視点・営為が十分に組み込まれてこなかったということが挙げられる。十七世紀の名古屋城については、主に天守・御殿等の諸建築と関わらせて築城期や尾張徳川家初代義直期の出来事が断片的に取り上げられてきたものの、築城者、そして大名とその家族の居所として中長期的な時間幅で分析した研究は管見に入らない。

名古屋城は、義直が入城する以前においては、特に二之丸が平岩親吉や家康・秀忠の駐留地・御座所として位置づけられ、また戦の世が終わり平時へと移った義直期以降においては尾張家当主や奥方の居所となり

日常的な生活が営まれ、かつ政庁として役人が詰める空間となった。名古屋城を居所としてきたこれらの人びとの視点・営為は、名古屋城の私たち（縄張・建築・庭・建物配置など）や空間としての性格の変化にも影響していったはずである。こうした者たちの視点・営為と関わらせて当該城郭の変遷を追うことで、知られざる事実を見出し、あるいは既知の事柄に対して新たな位置づけを与えることができるのではないかと考える。

十七世紀において誰が名古屋城を居所としたのか、またその者たちはいかなる意図を以て、いかにして名古屋城を造営・改変してきたのか、そしてそれらの営為を受け、名古屋城の位置づけはどのように変わっていったのか。本シンポジウムは、こうした視角を以て当該期の名古屋城のすがた、そしてその成り立ちと変遷の一端を捉えることを趣旨とした。

二 分析対象の設定―なぜ二之丸か―

本シンポジウムは、特に二之丸を分析対象として設定した。元和六年（一六二〇）の義直の二之丸移徙以降、二之丸が尾張徳川家当主の居所兼政庁となり、名古屋城の中核であったからである。当然、奥方・諸役人の日常的な活動も二之丸が中心となり、史料的にも二之丸に関する出来事が多く記録された¹¹。つまり、名古屋城の歴史を紐解いていくためには、おのずと二之丸に着目せざるをえない。

また、元和二年に義直が駿府から名古屋城へ移る以前、二之丸は大御所・将軍の御座所としての性格が強かったと思われる、その意味でも二之丸に焦点を当て、義直入城前後を通して分析していく意義は大いにあるう。

一方で、二之丸には象徴的空間として二之丸御庭が存在した。尾張家初代義直が作った御庭であるが、その作庭には上田宗箇が係わったなど、戦前・戦後の研究で推定として示された見解が長らく浸透してきた¹²。これらは主に作庭家・庭園史研究者によって提唱されてきた説であるが、推論に大きく依拠している点に問題があった。これに対し井上光夫氏は、史資料に基づき、義直期の二之丸御庭について整理した¹³。氏は、上田宗箇が御庭設計に係わったとする従来の見解を否定し、義直に仕えた儒者である堀杏庵などの関与を想定した。旧来の所説を退ける氏の見解には首肯できる点が大いにあるものの、それでも状況的証拠に頼らざるをえないという限界も抱え、こうした点に対して今後いかに検証を加えていけるかが課題となるう。かかる御庭の成り立ちやその後の変遷を解明していくためにも、二之丸を分析対象とすることには意義があると考える。

以上の観点から、本シンポジウムでは名古屋城の中核としての二之丸に主軸を据え、その成り立ちと変遷を追うため、十七世紀の出来事や史料解釈等について議論した。

三 本報告書の概要

本報告書は、シンポジウム講演・報告の内容を基にした論考を四本収録した。ただし、口頭での講演・報告では時間の関係等により十分に議論できなかった点やその後の検討を経て修正を要すると判断した点については、各執筆者の判断で加筆・修正を行った。また、報告者四名の間で行われたパネルディスカッションの記録も収録している。

三浦正幸氏「類例なき特別な二の丸をもった名古屋城」は、主に縄張の観点から名古屋城を分析し、特に名古屋城の前後に築城された他城郭

との比較により、名古屋城二之丸の「類例なき」特徴を捉え、その特質を論じる。二之丸に着目することで、当初の名古屋城の位置づけについて重要な指摘を行っている。

今和泉大「十七世紀における二之丸の変遷」は、築城期から光友・綱誠期までの二之丸の変遷について、主に二之丸を居所とした者との関連で論じる。築城期から義直期にかけては、従来の研究・著書でも詳細に取り上げられてきたが、名古屋城との関連で光友・綱誠期の出来事が扱われることはほとんどなく、この点にも留意し十七世紀の変遷を見通す。堀内亮介「十七世紀の二之丸御庭造営と改修」は、題目通り、二之丸御庭の造営と改修について分析するものである。二之丸御庭の造営に、義直がいかに係わったのか、そして、御庭を構成する聖堂などの諸要素がどのように変遷していったのかを、新出・既出の史料を駆使して論じる。

並木誠士氏「絵画史からみた「中御座之間北御庭惣絵」」は、義直期の二之丸御庭の絵図とされる「中御座之間北御庭」を絵画史の視点から分析する。初期の二之丸御庭のすがたを描く絵図として古くから注目されてきた当該絵図だが、美術史・絵画史の視点で正面から論じられることはほとんどなかったのではないだろうか。既知の資料を捉え直すという意味でも、非常に重要な試みである。

なお、執筆者間で見解や用語の使い方で一致をみない点も一部あるが、本報告書ではあえて統一せず、各執筆者が提示するまゝを示した。

これらの論考により、如上の課題すべてに取り組めたわけではないが、当該期の名古屋城について基礎的事実を整理し、また新知見・新解釈も提示できたと考える。本報告書の成果が今後幅広く活用されとともに、

議論が活発になることを期待したい。

註

- (1) 大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）寄託収蔵、高橋正彦編『大工頭 中井家文書』（慶應通信、一九八三年）。
- (2) 代表的なものに城戸久「名古屋城天守造営年次考」（『建築學會大會論文集』一七号、一九四〇年）、同「名古屋城上洛殿の造営について」（『建築學會大會論文集』二二号、一九四一年）、同「名古屋城本丸殿舎建築私考」（『美術研究』第一一六号、一九四一年）など。なお、『日本名城集成 名古屋城』（小学館、一九八五年）所収の「名古屋城および城下町関係文献総目録」（二一六頁）は、昭和六十年（一九八五）段階での名古屋城関連の文献をほぼ網羅していると見なせるが、その一覧を見てもわかる通り、建築史あるいは障壁画関係の文献が大半を占めることがわかるだろう。
- (3) 『名古屋城史』（名古屋市、一九五九年）。
- (4) 前掲註（2）『日本名城集成 名古屋城』。
- (5) 木村慎平「『現場』からみた名古屋城石垣普請」（『史料が語る 名古屋城石垣普請の現場』（名古屋城調査研究報告三 資料調査研究報告書二）、二〇二二年）。
- (6) 拙稿「慶長期成立の名古屋城「四つ之御矢倉・二つ之御門・唐門」」（『名古屋城調査研究センター研究紀要』第五号所収、二〇二四年）を参照。
- (7) 前掲註（2）『日本名城集成 名古屋城』所収の「名古屋城関係史料」（一八五頁）は、名古屋城（特に初期）に関する基礎的な史料集成として今なお参照されているが、たとえば史料三〇四号（『中井家史料』、十一月二十九日付小堀政一・中井正清宛土井利勝外二名連署状）は差出人の官職名等から明らかに名古屋城に関係なく、他城郭関連の史料と判断される。なお、この内『中井家史料』（『大工頭中井家文書』）の多くについては、山本紀美「天下人の城大工 大工頭中井家文書の史料翻刻と現代訳」（『天下人の城大工—中井大和守の仕事Ⅲ— 大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）、二〇一五年）が位置づけ（どの城郭に関連する書状か等）や年代に関する最新の見解を示している。

- (8) 前掲註(5) 木村論考。
- (9) 『源敬様御代御記録 第一〜五』(八木書店、二〇一五〜一九年)。
- (10) 『瑞龍公実録』(八木書店、二〇二二年)。
- (11) 十八世紀以降の期間しか残っていないものの、尾張家当主の側に仕えた御小納戸役の業務日記である「尾州御小納戸日記・尾州御留守日記」(ともに徳川林政史研究所蔵)には、二之丸関連の仕事や出来事などが記録されている。
- (12) 代表的なものに、沢田天瑞「名古屋城二之丸庭園の鑑賞」(『名勝名古屋城二之丸庭園公開された御殿の奥庭』名古屋城振興協会、一九六七年)、重森三玲「名古屋城舊二之丸庭園」(重森三玲・重森完途『日本庭園史大系 第十二卷 桃山の庭(五)』社会思想社、一九七三年)など。二之丸庭園をめぐる研究史と問題点については、本書所収堀内論文が整理しているので参照されたい。
- (13) 井上光夫「中御座之間北御庭惣絵 考 名古屋城二之丸創建期における庭園の変遷」(『文化財叢書第九七号』(名古屋市教育局教育委員会、二〇一三年))。